

札幌市文化財調査報告書

VIII

1974

札幌市教育委員会

札幌市文化財調査報告書Ⅷ

Ⅱ 311 遺跡

1974・8

札幌市教育委員会

例 言

1. 本書は、昭和45年11月1日から同15日にかけて実施した、株式会社地産高層分譲住宅用地内に存在する遺跡発掘調査報告書である。
2. 本調査は、札幌市教育委員会文化財調査員加藤邦雄の担当のもとに、同上野秀一、羽賀憲二の3名が現場の仕事に従事した。
3. 発掘調査には、伊藤加代子、内山真澄、大原勢司、笠井衛二、斉藤城徳、中津欣也、藤井則明、長谷川克弘、佐々木巖、高野久樹、が従事した。
4. 遺物整理は伊藤加代子、内山真澄、大原勢司、笠井衛二が当った。
5. 挿図浄書は、主として小尾栄子が担当した。
6. 発掘調査には、北海道教育委員会文化財係、株式会社地産、西松建設株式会社、附田組、山崎恒氏宅等のたゆまざる指導と協力を賜わった。記して謝意を表する。

(敬称略・順不同)

目 次

- 第 1 章 調査にいたる経過
- 第 2 章 遺跡の位置と環境
- 第 3 章 発掘調査の方法と遺跡の層序
 - 1. 発掘調査の方法
 - 2. 遺跡の層序
- 第 4 章 遺構及び遺物
 - 1. 遺 構
 - 2. 遺 物

挿図目次

- 第1図 遺跡附近地形図
- 第2図 遺跡地形図及び発掘区配置図
- 第3図 発掘区配置図
- 第4図 遺跡地層図
- 第5図 土器実測図
- 第6図 土器拓影
- 第7図 石器実測図

図版目次

- 第1図版A 遺跡遠景（東より）
- 第1図版B 遺跡遠景（南西より）
- 第2図版A 遺跡層序
- 第2図版B 出土遺物
- 第3図版 出土遺物

第 1 章 調査にいたる経過

札幌市街地域の再開発は、この近年めざましい速度で進んでおり、事務所街の高層化はもとより、住宅街における高層化も急速に進んでいる。かつては、小規模な個人住宅の建てられていた地域が高層化するにともなう、埋蔵文化財の破壊もかなりの件数にのぼっている。個人住宅の場合であれば、もしそれが見落されたとしても、遺跡の破壊は、土台等の極めて限定された部分のみであり、将来の発掘調査への希望をつなぐことが出来るであろう。しかし、高層住宅の建築に当っては、見落しがあった場合には、それが即座に遺跡の全面的な破壊へつながることはいうまでもなからう。だからと言って、小さな工事にかかる遺跡の破壊を決して安易に考えているわけではなく、すべての遺跡のすべての現状変更には、細心の注意と最大の努力を講じなければならぬ。

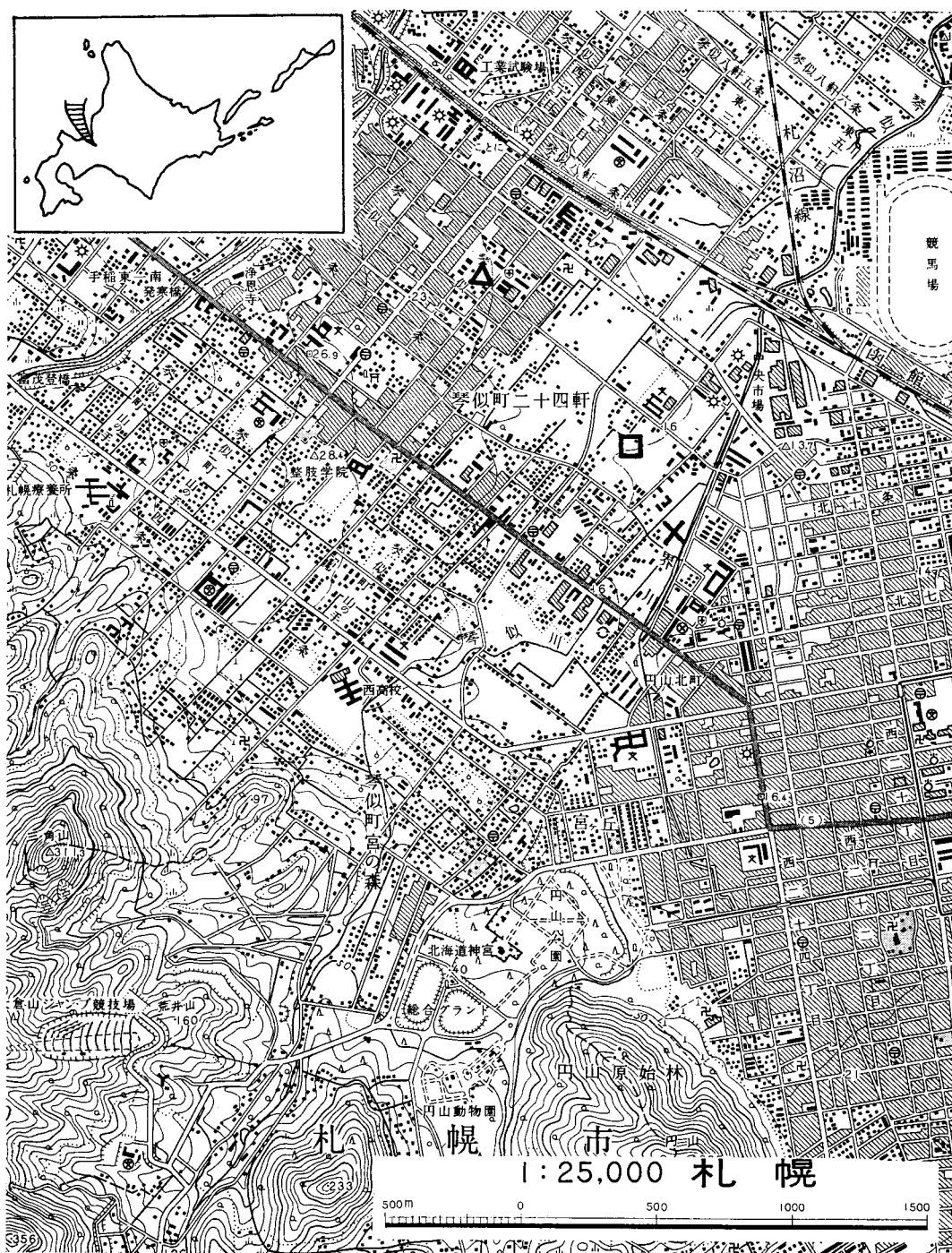
札幌市教育委員会では、かかる立場より、その第一段階として、1973年より市内各所に存在する埋蔵文化財の正確な分布図作成に努力して来た。その途次において、工事着工寸前の破壊の危機にさらされていた幾つかの遺跡についての事前調査を実施することができた。

本報告書の遺跡も、早くから、この地点にその存在を確認していた。幸にして株式会社地産より工事着工前に遺跡の取扱いについて善処したいとの好意ある申し出があり、現状保存、事前調査等の方策について数回にわたる話し合を実施した。その間、若干の紆余曲節があったが、種々なる条件から事前調査を実施することになった。

第 2 章 遺跡の位置と環境

本遺跡の南側は、約 4 km で西南部山地に接し、北側は広く石狩平野を望む標高約 19~20 m の発寒川扇状地上に位置する。地番は札幌市西区琴似 1 条 3 丁目 83 番地 17 である。

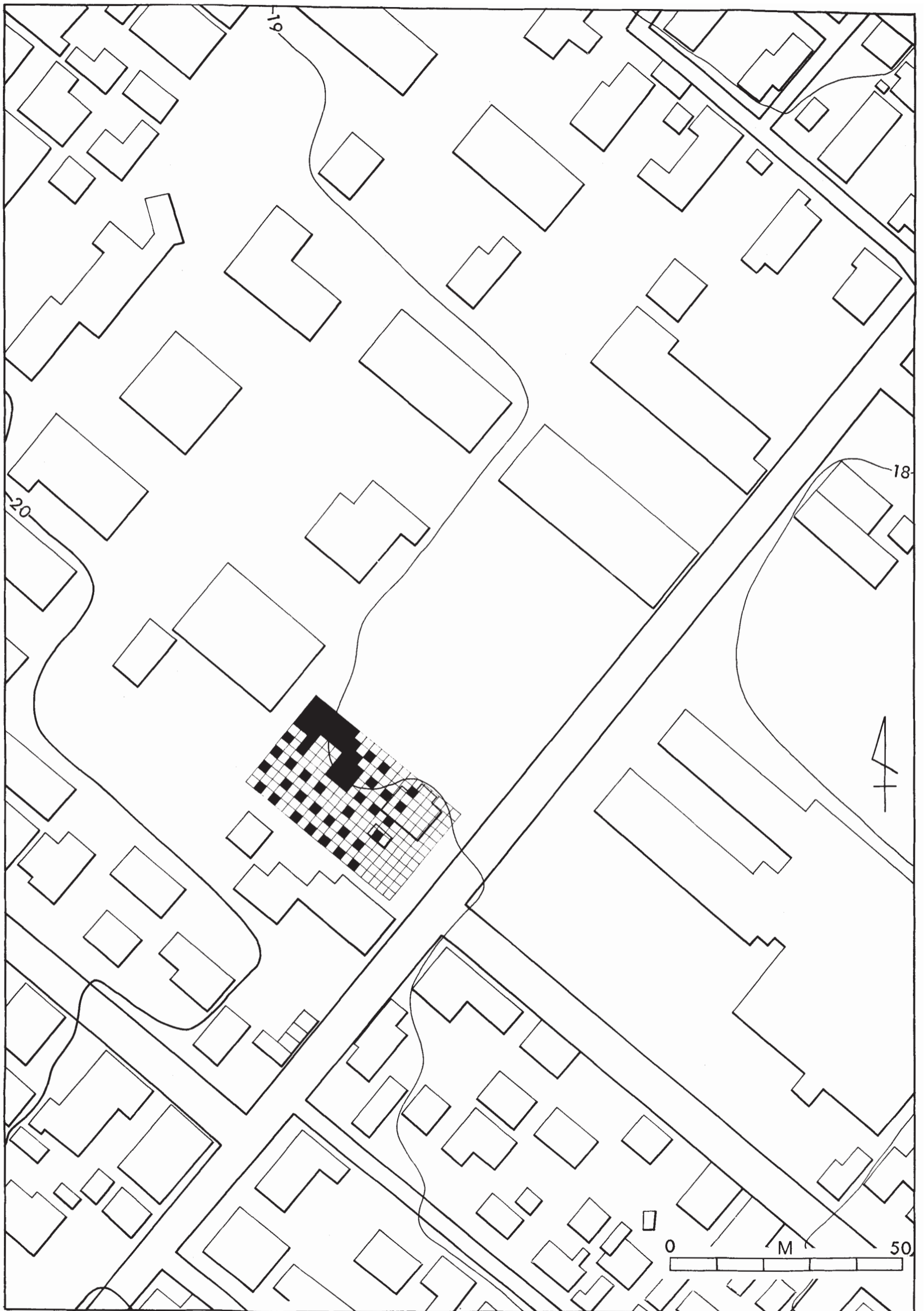
本遺跡附近一帯は、昔から種々なる遺物及び人骨等の出土により、遺跡の存在することが知られていた。例えば、琴似町史によれば、本地点の至近距離から、人骨の出土を報じており、本遺跡の東約 5・600 m には擦文時代の土器片が多数出土すると記している。1973 年度の札幌市教育委員会の発掘調査によっても、続縄文時代から擦文時代の墓及び擦文時代の竪穴住居跡が発見されている（N-162 遺跡、第 1 図□）。また本地点より南東へ約 1.2 km の地点からは続縄文土器と擦文時代竪穴住居跡 1 軒が発見されている（N-154 遺跡、第 1 図×）。更に 1973 年に実施した遺跡分布調査によっても続縄文時代から擦文時代を主体とする土器片がいたるところに確認され、この地域一帯が該時期の生活に適していたことが窺える。附近一帯は、すでに古くより宅地化されており、今となっては、その全容を明らかにすることは不可能であろう。



第1図 遺跡附近地形図

(本書に掲載した地図は建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2.5万分の1地形図を複製したものである。)

(承認番号) 昭49道複、第56号



第 2 图 遗迹地形图及发掘区配置图

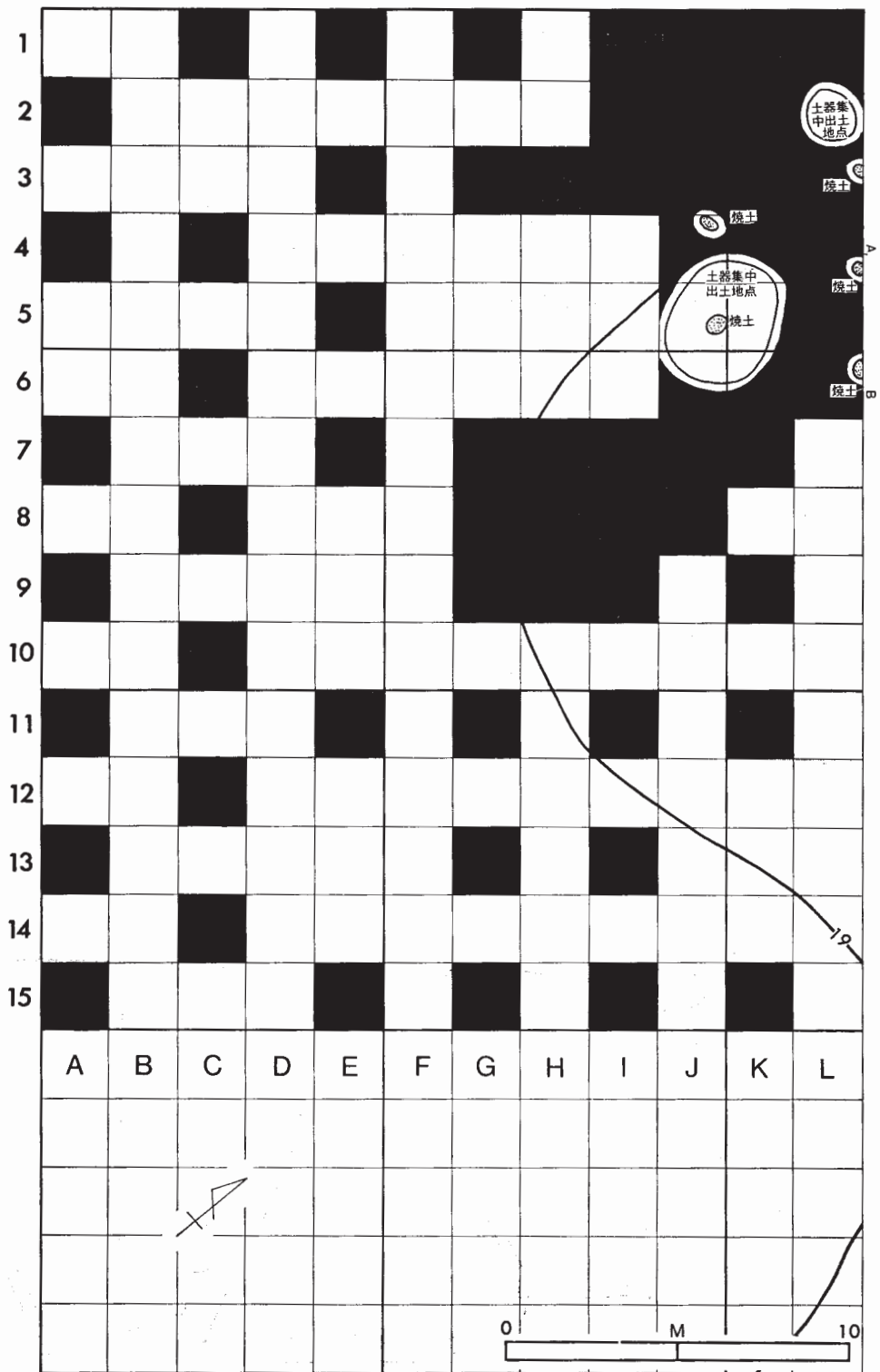
第 3 章 発掘調査の方法と遺跡の層序

1. 発掘調査の方法

遺跡の南側部は、かつて民家が存在しており、相当に荒れているために、北側部に発掘の主力を注いだ。発掘予定地の全面に 1 辺 2 m の発掘区を設定し、北西—南東軸を北西から 1 ~ 20、北東—南西軸を南西より A ~ L に分割した。各発掘区の呼び方は A-1、B-1 となる。遺物の出土は、G ~ L の 1 ~ 9 区にかけて多く見ることができ、この部分をかなり精査したにもかかわらず遺構は、何ら発見することができなかった。

2. 遺跡の層序

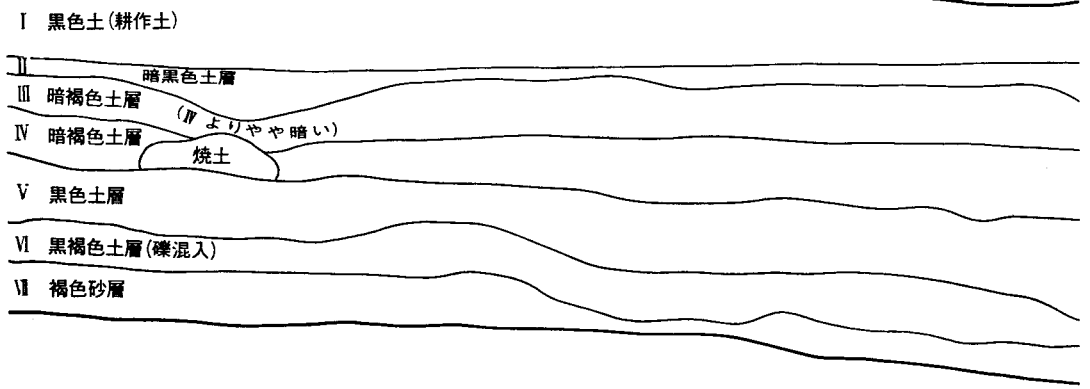
本地点のほぼ全面にわたって同一の層序を示している（第 4 図）。上層に黒色土が約 25 cm の厚さで見られ、その下部に暗褐色土が存在する。その下には、再び黒色土が見られた。出土遺物は、第 V 層の暗褐色土の下部から、第 V 層黒色土の上面にかけて発見された。出土遺物が比較的多く見られた発掘区では、第 V 層の上面に 5 ケ所にわたって焼土が発見された。これらの事実から見ると、第 V 層の暗褐色土層は、河川の氾濫により運ばれて来たものと思われる。第 VI 層、第 VII 層はともに砂質であり、ところにより河原石が多数見られた。



第3图 発掘区配置図

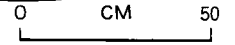
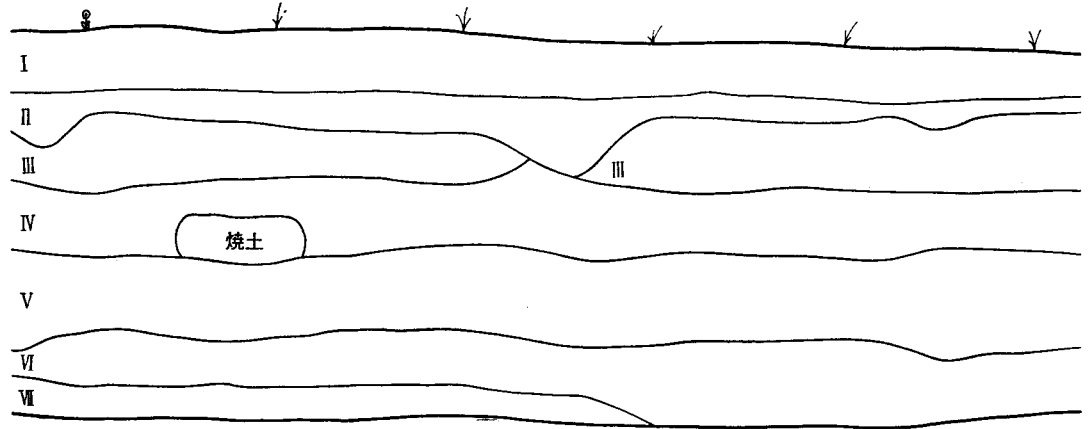
A17, 690

B



B

C



第4図 遺跡地層図

第4章 遺構及び遺物

1. 遺構 (第6図)

住居跡、その他の確たる遺構は何ら発見されなかった。ただJ-4、J-8、L-8、L-4、L-6の発掘地区から焼土が発見された。いずれも径約30cm、厚さ10cm前後のものであり、第Ⅶ層黒色土の上面に見られた。L-5区に見られた焼土の周辺から、長径約4m、短径約3mにわたって縄文時代の土器片がかなりまとまって発見された。

2. 遺物

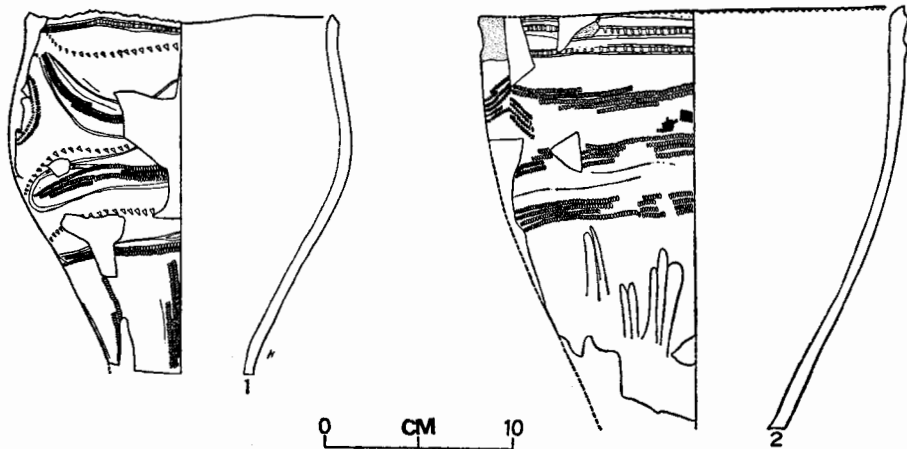
土器

後北C式土器 (第5図1、第6図1~4)

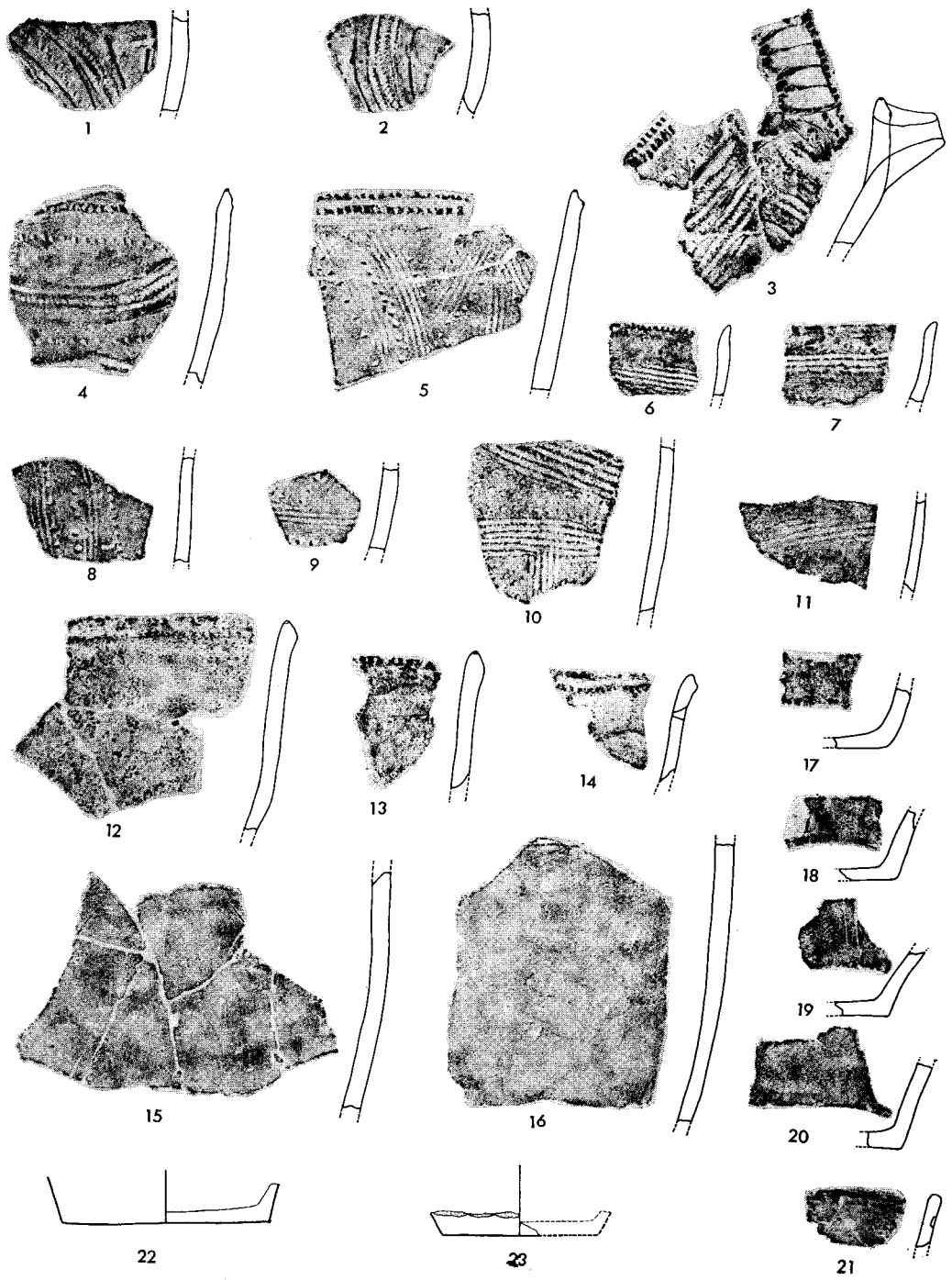
第5図の1は高さ現存13cm、口径推定17cmである。口縁の一部には、おそらく第6図3に見られる如くの注口がつくものであろう。器形は、胴部上半の径に比して口径がやや小さい深鉢形である。口唇に刻み目を有し、口唇直下にも刻み目を有する隆起帯をめぐらす。以下帯縄文と三角列点文、微隆起線の組合せによる文様を作る。色調は茶褐色であり表面は一部剝脱している。内面の一部には、炭化付着物が見られる。第6図1~4もほぼ同様な土器である。

後北D式土器 (第5図2、第6図5~23)

第5図2は、底部を欠く以外はほぼ完全な形をしている。高さ現存22cm、口径22.5cmである。口唇部に刻み目を有し、口唇直下に刻み目をつける2条の隆起帯をめぐらす。胴部上半には粗雑



第5図 土器実測図



第6图 土器拓影

な帯縄文を施文する。胴部は縦方向のへり整形を行っている。色調は茶褐色であり、内面に一部炭化付着物が見られる。

第6図5、9、10は、帯縄文と三角列点文の組合せによるもの、6、7、11は、帯縄文のみのもの、12、13は、口唇の刻みと、直下に刻み目を有する隆起帯をめぐらすのみのもので、両面に炭化付着物が著るしく見られる。16は、無文のものである。21は、口縁に外側からの円形刺突の見られる例であるが、いわゆる北大式といわれるもののそれより明瞭でない。小破片なので、全周に施文されるものであるか否かについても不明である。その他はすべて平底の底部である。いずれも焼成はあまり良好ではなく、茶色を呈するもの（11、15、16）を除いて黒褐色である。

石器（第7図）

1は石英を利用した石器で腹面は一次剝離面のままで、背面の右辺と一端に刃部を作り出している。2、3、4は、縦長の剝片を利用し、2、4は、搔器でその一端を刃部とし、3は両側に刃部を作る削器である。5～12はいわゆる円形搔器で、5～7、9は、薄い刃部を有し、8、10～12は背の高い刃部を作出する。いずれも黒耀石製である。13は、磨石であろう。

重量は、1—31.1g、2—2.9g、3—0.9g、4—2.5g、5—1.4g、3—2g、7—2g、8—2.5g



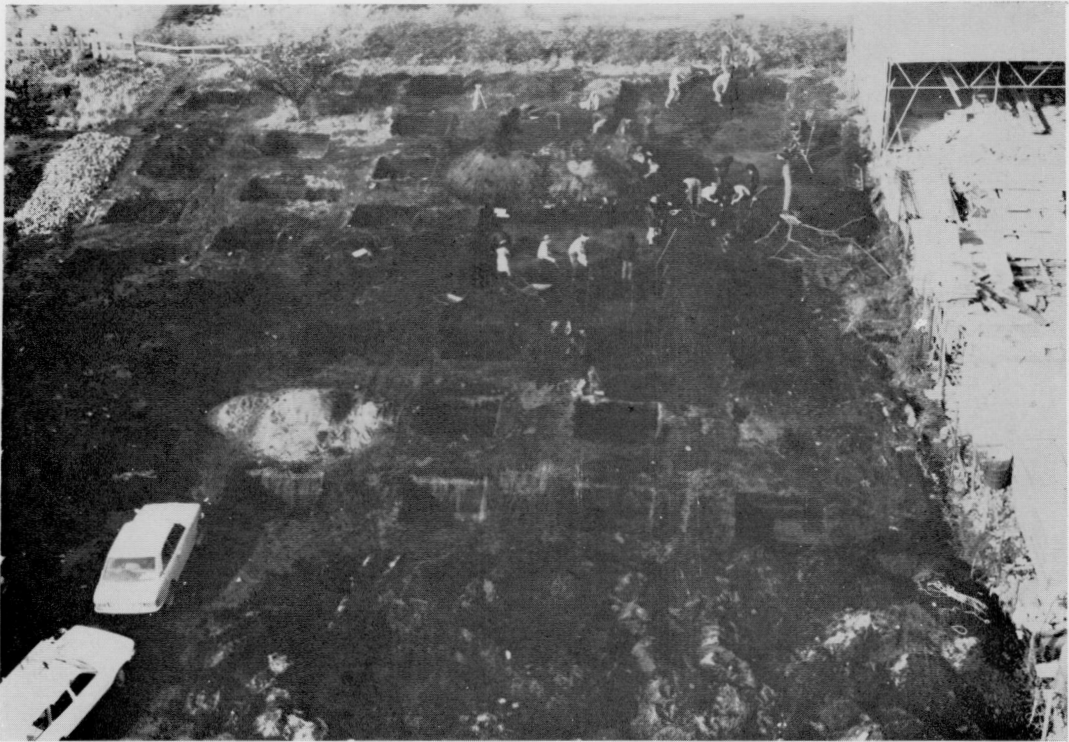
第7図 石器実測図

9—2.8g、10—8.2g、11—3.2g、12—2.6g、（15—315g）である。

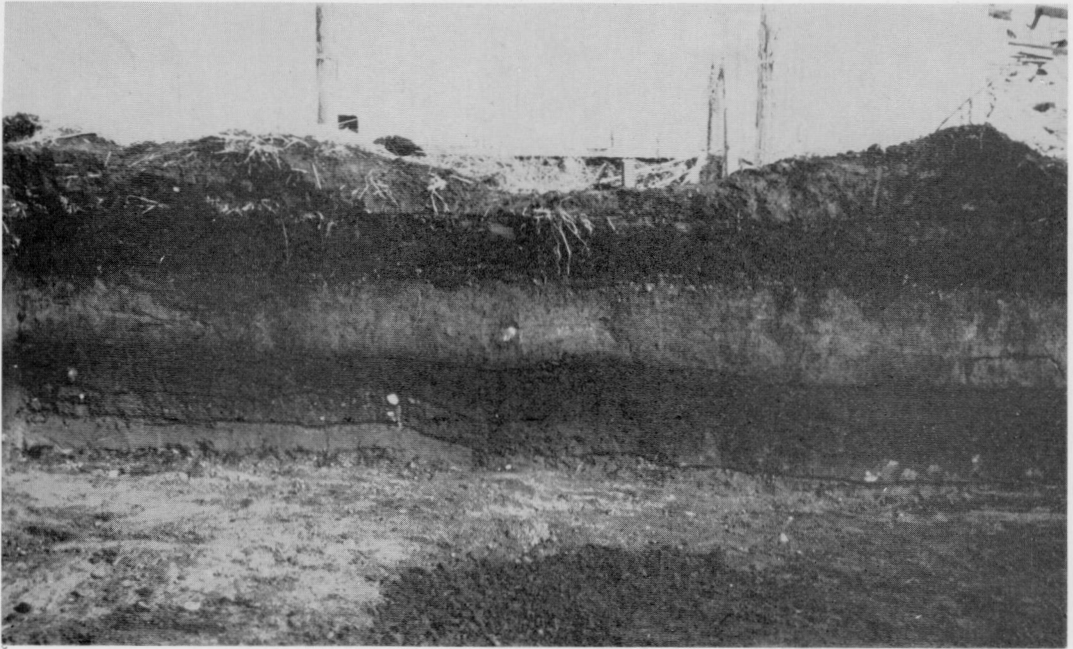
以上、調査結果について述べてきた如く、本遺跡からは、焼土5ヶ所と土器、石器が若干得られたのみである。遺跡の中心部はおそらく隣接地にあるものと思われ、今回の発掘では、その一部を発掘したにすぎず、遺跡の性格について積極的な証を得るに至らなかった。



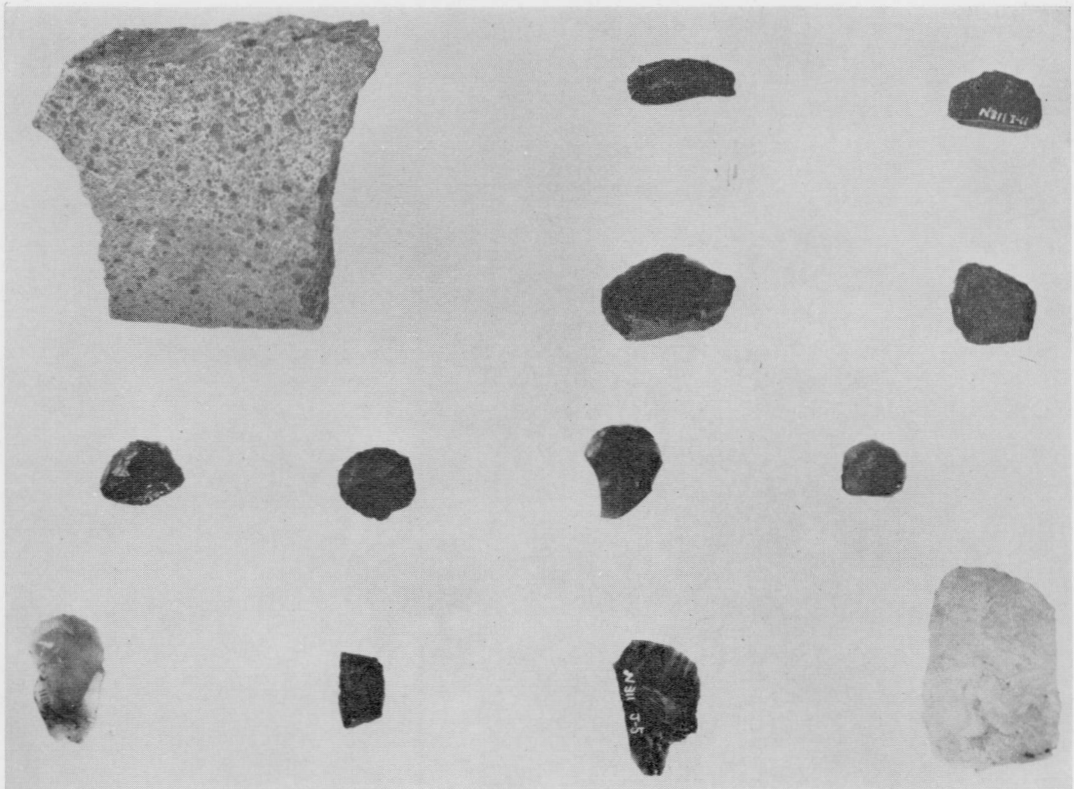
A. 遺跡遠景（西より）



B. 遺跡遠景（南東より）



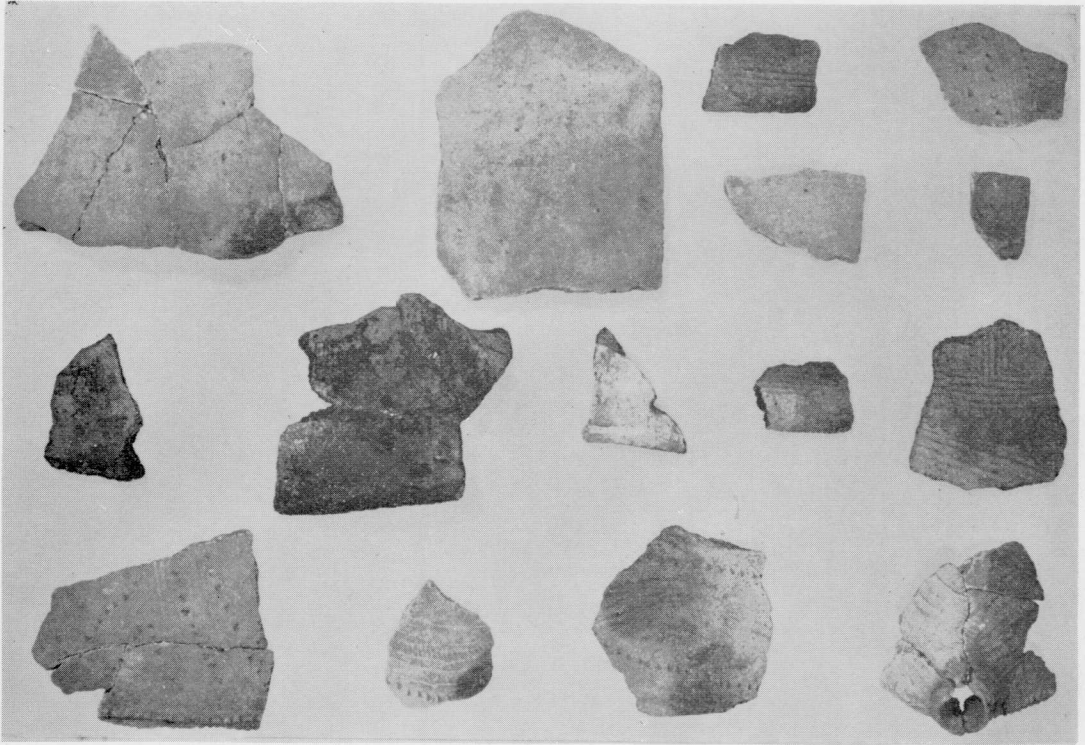
A. 遺跡層序



B. 出土遺物 約 $\frac{1}{2}$



第3図版 出土遺物約々



第 4 図版 出土遺物 約 1/5

札幌市文化財調査報告書 Ⅷ

N 3 1 1 遺 跡

昭和49年8月25日印刷

昭和49年8月31日発行

発行者 札幌市教育委員会
札幌市中央区北1条西2丁目

印刷所 飯村印刷株式会社
札幌市中央区南8条西18丁目